

# 日本比較文化学会・中部支部ニュース

第 5 号

2014 年 3 月 31 日発行

## 2013（平成 25）年度中部支部総会報告

（中部支部長：岡本武昭）

2013（平成 25）年度の中部支部総会は、中部支部第 5 回大会（静岡県立大学，2014.3.2）にて開催されました。以下、簡単に議事を報告します。

### ○報告事項

1. 2013（平成 25）年度新入会員（2 名）
2. 2013（平成 25）年度日本比較文化学会大会，6 月 8 日，於：同志社大学（今出川キャンパス）  
当日の研究発表会司会者（支部推薦）として安藤雅之（常葉大学）を推薦。
3. 中部支部ニュース 3，4 号発行  
第 3 号（2013 年 5 月 30 日），第 4 号（2014 年 1 月 30 日）
4. 中部支部第 4 回，5 回大会（研究会）開催  
中部支部第 4 回大会，2013 年 10 月 5 日，於：浜松学院大学  
統一テーマ：改めて「比較文化」を見つめる  
第一部 基調講演，公開討論会  
第二部 自由研究発表  
中部支部第 5 回大会，2014 年 3 月 2 日，於：静岡県立大学  
統一テーマ：再び、「比較文化」を考える  
第一部 自由研究発表  
第二部 基調講演，公開討論会
5. 中部支部役員会  
第 1 回 4 月 20 日，於：クリエート浜松（新年度計画審議）  
第 2 回 5 月 25 日，於：常葉大学大学院サテライトキャンパス（中部支部の特色）  
第 3 回 9 月 22 日，於：クリエート浜松  
第 4 回 10 月 5 日，於：浜松学院大学  
第 5 回 12 月 15 日，於：クリエート浜松（次年度新役員候補者の審議・提案）
6. その他：支部ニュースレター（第 5 号）作成について

### ○審議事項

1. 2014（平成 26）年度新役員選出について  
中部支部長  
澤田 敬人（静岡県立大学）  
副支部長  
安藤 雅之（常葉大学），津村 公博（浜松学院大学），川口 雅也（浜松学院大学）  
会計監事  
津村 公博（前出）  
事務局長  
川口 雅也（前出）  
会計・広報等  
白鳥 絢也（星槎大学）  
ハラスメント委員  
太田 敬雄（日本比較文化研究所）  
三宅 恵（旧姓：加瀬谷，日本比較文化研究所員）

2. 中部支部からの理事候補者推薦順位

現在、中部支部の理事は支部長1名、陪席1名である。

本年度（2014年6月14日、北九州国際会議場）の日本比較文化学会理事会・総会で理事人数と中部支部格上げを審議。承認されると現行（中部支部）では理事1名を2名になる。

支部推薦理事候補

1. 澤田 敬人
2. 安藤 雅之
3. 津村 公博
4. 川口 雅也

なお、支部長は理事。

3. その他：中部支部の今後の活動について

**2013（平成25）年度中部支部決算報告**

（事務局長：渡部いづみ）

平成25年度 日本比較文化学会中部支部 会計報告書

自：平成25年4月1日

至：平成26年3月31日

（単位：円）

支出の部			収入の部		
科目	金額	摘要	科目	金額	摘要
会場使用料	1,600	9/22 クリエート浜松	前年度繰越金	27,983	
			補助金	10,000	8/29 日本比較文化学会本部より
			受取利息	3	4/1 ゆうちょ銀行利息
			受取利息	4	10/1 ゆうちょ銀行利息
次年度繰越金	36,390				
合計	37,990		合計	37,990	

現金残高 19,650

ゆうちょ銀行残高 16,740

36,390

以上のとおり報告致します。

平成26年3月31日

日本比較文化学会 中部支部長 岡本 武昭

監査 白鳥 絢也

会計・事務局長 渡部いづみ

## 2013（平成 25）年度中部支部第 5 回大会報告

2014 年 3 月 2 日（日）、静岡県立大学において第 5 回大会が開催されました。以下、発表要旨を掲載いたします。（※敬称略）

### ○テーマ：再び、「比較文化」を考える

総合司会：安藤 雅之（常葉大学）

#### 【第 1 部】

・自由研究発表（一人発表 25 分＋質疑応答 10 分）

司会：岡本 武昭（中部支部長）・津村 公博（浜松学院大学）

### 特別活動における「伝統・文化」に関する実践課題

#### －外国籍児童が在籍する小学校の事例から－

白鳥 絢也（星槎大学）

外国籍の子どもを積極的に受け入れている A 小学校では、まず外国籍の子どもたちに対して、自らの国民的アイデンティティを阻害しないことに留意している。本人の自国民としての立場を保障することと、日本語や日本の風習について十分に教育することを同時に目指し、日々の実践が営まれている。その際、①違いを違いとして認め合うこと（相互主義）、②多様性を認めること（多元主義）、③異質と多様性を認める以上、自分自身の独自性を確立すること、④独自性と同時に、普遍性をも理解すること、を重視している。

具体的な取り組みとしては、外国籍の友だちと仲良くなろうというコンセプトのもと、劇やクイズなどを通してその子どもの母国について日本人の子どもへ紹介するといった機会を設けている。同時に、日本のことや地域の特性について、劇やクイズで外国籍の子どもに紹介するという活動も行われている。また、地域に在住する外国人をゲストに招き、その出身国について食べ物や民族衣装、民族音楽などを紹介してもらうという授業もある。

地域の自然や歴史、文化、施設や人材を活用した実践もみられる。川の上流から下流までの様子、水質や生き物、川と住民との生活や歴史について調べたり、河原や土手での遊びを体験したりしている。また、地域の伝承芸能を体験したり、先人の活躍（小泉八雲等）を調べたりしている。さらに、博物館や図書館、高齢者施設等を訪問したり、漁師や商店街の人を招いて仕事の話をしてもらったりといった学習が行われている。

その他、東海一の荒祭りと言われる「焼津神社例大祭」、重要無形民俗文化財に指定されている「藤守の田遊び」等、地域に伝承する行事に外国籍の子どもが参加することを実践している。（実際に参加したり、街を飾るイラストを描いたりする）市内各商店街や地域の神社、仏閣等で行われるお祭りを地域の人たちと一緒に創っていくことを通して、その地域の結びつきや絆を強めるねらいがある。また、その地域における伝統文化を継承し、知ることによって地域に対する愛情も増し、それが外国籍の子どもも含めた「地域住民」によるまちづくりの第一歩に繋がっていくと考えている。

外国籍の子どもに限らず、日本人の子どもにとっても、これらの体験は自国文化への理解、郷土の文化を保存し継承してきた先人の思いを肌で感じることに繋がるはずである。身近な体験を通して、自分たちの生き方を支えてきた歴史や文化への理解を深めることは、他国・他民族の持

つ歴史や文化を尊重する態度の育成にも繋がるものと考えられる。

大切なことは、日々の教育活動を見直しながら意図的な指導を続けることである。小さな異質・多様性を積み重ねることである。自分と相手の違いを認め、尊重するという生き方の確立を図ることは、小学校において大きな課題であり、伝統・文化に関する実践から育まれるものであるともいえる。

## 米国テレビ・ドラマを通して、文化を比較する

川口 雅也 (浜松学院大学)

文化比較をするときに陥りやすいことがある。わかりやすい例で言おう。米国のバスの扉は車体の右側にあり、日本のそれは左側にある、それゆえ、米国と日本はかくも違うのだと。しかし、その違いは、それぞれの国において、車は右側通行、左側通行という状況に合わせただけのことで、どちらも安全性・利便性を考えるという本質的には同じ発想から生じたものである。表面的な相違を見出して比較を完結するのではなく、その根本にある類似にまで至って初めて比較という行為は意味を成すのではないか。

「比較文化論」という講義で、*The OC*(2003-07)という米国のテレビ・ドラマを用いて文化比較の在り方を学生たちとともに考えているが、「ドラマを観て、文化を比較してみよう」と問いかけると、学生たちは違いを見出そうとする。例えば、富裕層が暮らすプール付の住宅に真っ先に目がいってしまう。その場面以前に貧困層が暮らす狭い住宅を見ているにも関わらず、住宅事情が良くないという日本で多く見られる状況と似ている状況には注意が向かわないのである。

ところが、「ドラマを観て印象に残ったところは」と問いかけの仕方を変えると、学生たちが指摘するのは、日本、いや、学生たち自身の日常生活に身近なところが多くなる。親に隠れて喫煙している高校生たちの姿を見て、「社会に不満があると、タバコを吸ってルールを破りたくなるっていう気持ちは良くわかる」とか、「お金持ちの御嬢様でもタバコを吸っているということは、お金があるからといって幸せという訳でもないですよ」といった答が返ってくる。米国であっても日本であっても大差のない、自分たちと似ている部分が学生たちの印象に残ることがわかる。

*The OC*のような、物語が連続していくテレビ・シリーズを教材とすることの利点は、作品を観続けるにつれて、作中人物に共感を覚えていくという点にある。そのようにして、作中人物に対する思い入れが深まるにつれて、彼らの喜びや悲しみに学生たちも一喜一憂するようになり、印象に残る場面＝感動した場面、ということになっていく。感動する場面というのは、直接自らの心に入ってくる場所であり、人間にとって極めて本質的な場所である。好きな人の笑顔に癒される、でも、失恋すると辛い、自分もっていないものを他の人がもっていると妬む、でも、自分ももっているのであれば、他の人を祝福したい気持ちになれる・・・そんなところに学生たちは感動する。いつの時代にあっても、どの場所においても、人間の本質は似ている。感動の元を辿れば、類似に行き着くのである。

類似に着目して文化を眺めることが何故たいせつなのか。それは他の文化との交流の敷居を低くしてくれるからである。「異文化交流」と呼ばれることが多い文化交流であるが、実際には、その「異」など表面的なものに過ぎず、どの文化で生活していようが、人間は思っているほどには違わない。それに気づいたとき、それぞれが属する文化を越えて、人は誰とでも気軽に交流できるようになるのである。

## 【第2部】

- ・ 基調講演 「「比較教育文化論」とは？」

白鳥 絢也 (星槎大学)

- ・ 公開討論会 「再び、「比較文化」を考える」

パネリスト：今井 敏晴 (常葉大学学生)  
藤巻 拓 (常葉大学学生)  
杉本 有規 (常葉大学学生)  
白鳥 絢也 (星槎大学)

コーディネーター：澤田 敬人 (静岡県立大学)

## 基調講演ならびに公開討論会

澤田 敬人 (静岡県立大学)

2013年10月に開催した中部支部第4回大会において「比較文化」を改めて検討する場が生まれた。5か月経った今回の第5回大会では、これまで検討してきた内容を継承し、「比較文化」についてより精緻に、より広範に、より対話的に検討することを目的として、基調講演ならびに公開討論会を企画した。基調講演では「「比較教育文化論」とは？」と題して白鳥氏から比較教育学における比較文化の豊饒なフィールドを紹介していただき、比較文化という営みの普遍性と個別の事例の深遠さを十分に知らしめてもらった。この基調講演は、次の公開討論会の導入の役割も果たしており、登壇者のかたがたが発表する意味をよりわかりやすいものにした。

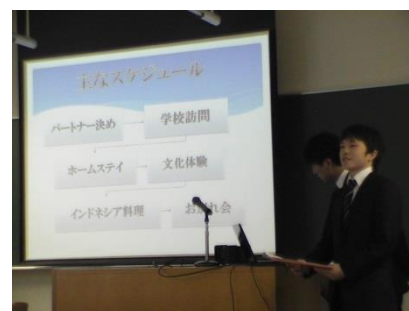
登壇者としてまず発表したのは、前回第4回大会で基調講演を行った太田氏に関係するインドネシアでの多文化交流の企画に参加した青年たちである。杉本君、今井君、藤巻君の3名は、企画の中での比較文化の営みを進めて体験値を高め、それを言語化し、両国の往来を継続化し、今回の発表に備えた。第4回大会で検討した内容は、(1)文化を考えると無意識のレベルをも含めて自ずと比較を行っている、(2)比較は楽しく、その快樂が快樂主義にとどまらぬレベルで物事を進歩させる、(3)比較は多元的な行為で、多様な見解が単純な二元論を超えたところで対話的に交差している、というものであった。今回の第5回大会の公開討論会では白鳥氏にも登壇してもらい、前回の検討内容を継承しながら改めて比較文化を論じてもらった。



澤田 敬人会員 (静岡県立大学)

杉本君たちの発表は、比較文化におけるフィールドワークの意義を示すには十分なものであった。これをコーディネーターの澤田と登壇者の白鳥氏が今回の本題に沿う形でフォローし、また、聴衆からの意見を引き出し、「複数の人々からなる楽しそうな比較文化の実践者が、多元的な異文化理解に向けた豊饒な語りを交響させる」という対話のサロンを作ろうと努めた。この試みがどのように評価されるかはわからないが、「比較文化」を徹底的に何度でも検討し直して、その成果として生じる新たな「比較文化」を我が物にしようとする中部支部の意気は伝わっているものと思われる。

## 第5回中部支部大会 スナップ



## 「中部支部」会員募集

### 中部支部大会 『名古屋地区』 開催者募集

「中部支部」会員を募集しております。当面、中部支部は他支部との合同による全国大会の開催を目指しています。中部支部が、全国大会開催や紀要編集をも担える支部にしていくために、みなさまのご協力をお願い申し上げます。

また、今後『名古屋地区』におきまして、中部支部大会を開催することを予定しております。つきましては、名古屋地区での支部大会開催推進の意思がある方を募集致します。

中部支部をより充実・発展させていくために、是非ご協力いただきたく、お願い申し上げます。開催を希望される方は、下記までご連絡下さい。お待ちしております。

○連絡先(澤田 敬人) : [sawada@u-shizuoka-ken.ac.jp](mailto:sawada@u-shizuoka-ken.ac.jp)

○ 同 (川口 雅也) : [kawaguchi@hgu.ac.jp](mailto:kawaguchi@hgu.ac.jp)

『中部支部ニュース』第5号  
発行：日本比較文化学会中部支部